

平成25年度長野県生涯学習審議会 議事概要

期日：平成25年11月1日（金）

時間：10時25分～16時00分

場所：宮田村公民館、伊那市高遠町公民館等

○出席委員 北林 瑞穂 委員 木下 巨一 委員 土井 進 委員
中村 雅代 委員 三澤 育子 委員 南沢 好恵 委員
山本 裕一 委員

○欠席委員 小林 文子 委員 白戸 洋 委員 塚田 芳樹 委員
山崎 弘 委員

○宮田村の出席者 平澤 武司 教育長 鈴木 仁 宮田村公民館主事
志村 浩樹 本坊酒造株式会社信州マルス蒸留所製造主任
平沢 秋人 ヤマソービニオン（ブドウ）栽培

○伊那市の出席者 原 和男 高遠町公民館長 矢澤 章一 ジオパークガイド

○県の出席者 伊藤 学司 教育長

東信教育事務所 菅沼久美子生涯学習課長 佐々木哲也指導主事
南信教育事務所 唐沢 久樹生涯学習課長
北信教育事務所 前田 好文生涯学習課長 後藤 卓己指導主事
生涯学習推進センター 荒深 徳重所長 中澤 美三主任指導主事
教学指導課 海沼 敦主幹指導主事
文化財・生涯学習課 小野 光尚課長
大槻 覚課長補佐兼総務係長
下條 伸彦生涯学習係長 島田 千恵主事
原 勝人主任指導主事 中原 敏主任指導主事
小池 千尋指導主事

○宮田村 平沢 秋人氏 ヤマソービニオン（ブドウ）畑 視察

1 開会行事

（宮田村公民館）

- （1）長野県教育委員会教育長挨拶
- （2）宮田村教育委員会教育長御挨拶
- （3）諸連絡

2 実践発表・意見交換

(宮田村公民館)

「宮田村ワインセミナーの活動について」

宮田村公民館主事

鈴木 仁 氏

本坊酒造株式会社信州マルス蒸留所製造主任 志村 浩樹 氏

(土井会長)

発表いただく前に、「公民館等を中心とした社会教育活性化支援プログラム」について、事務局から説明願います。

※事務局説明 資料5による

(土井会長)

「宮田村ワインセミナーの活動について」発表をお願いします。

※宮田村公民館主事 鈴木 仁 氏 資料1による

(土井会長)

公民館主事の鈴木さんは大変力のある方で、素晴らしいセミナーを開いておられことがわかりました。また、この席には本坊酒造の志村さんもお見えですので、この機会に質問をお願いしたいと思います。

ぶどうの生産者と村の人たちの学びを担当している公民館が、うまく連携して素晴らしい取り組みをされていると思いますが、みなさんの方からご質問いかがでしょうか。

みなさんから出るのを待ちながら、私の方からお聞きしたいのは、文部科学省のこのプログラムに採択されたのは今年からですね。そのことによって生産者の方や住民の方、公民館の方にどのような刺激が伝わっているのか、まずは醸造を担当する志村さんから話を伺いたいと思います。

(志村氏)

本坊酒造株式会社信州マルス蒸留所で製造主任をしております志村と申します。今日はこのような貴重な会議にお招きいただきありがとうございます。弊社は、先程見学いただきました平沢さんの畑と、中央道駒ヶ根インターの中間あたり標高798mに、信州で唯一のウイスキー蒸留所として、1985年に当宮田の地に会社を設立いたしました。現在ウイスキー以外にも、弊社の企業理念として地域資源を使った正直なお酒作りに邁進しております。その理念のもと15年前からヤマソービニオンストーリーが始まりまして、2000年から信州宮田ワイン「紫輝」を醸造させていただいております。

信州はもともと日本酒文化が盛んなところですが、実はワインも盛んに栽培・醸造が行われておりまして、長野県でも今年度から信州ワインバレー構想と銘打って、信州のワインを広く世界にPRしようということで取り組んでいます。

やはりワイン文化、お酒の文化というのは、人間が誕生した時からずっと密接な関係があるわけですね。単発で終わることなく根気強く、長く地道にやるということが大事だと思います。

これはぶどうの成熟、出来上がったワインの複雑性が増すのと共通しています。ですから、最初にワインセミナーを起こそうとした時に、どの位の頻度でやったらよいか、みなさんと協議したのですが、毎月やらなければダメだということを私は言いました。これが2ヶ月とか3ヶ月に1回ですと、ワインのことがもともと好きなファンの方はずっと頭の中にワインのことをイメージしてもらっているんですけども、みなさん同じ目的でワインセミナーに参加しているわけではありませんし、もともと公民館活動が好きでこのワインセミナーにも参加されている方もいらっしゃるので、みんなが1つの考えの中でワインのことを常に考えていただきたい、イメージしていただきたいということが、自分の目標の中にありました。

それ以外にも、宮田村らしいフットワークの良さを生かした取組、すぐ近くにヤマソービニオン畑がありますので、栽培を含めてすごく中身の濃いセミナーになっています。私も微力ながらご協力できるところは協力をさせていただいています。そして、今回鈴木さんから、国から支援をもらえるという話をお聞きした時に、まず全国でも珍しいセミナーの中で、更にパワーアップできることを非常に光栄に思いますし、受講生のみなさんが自分たちだけでは、どうしてもできないこと、ヤマソービニオンのことをもっとPRしたいんですけども、個人的な活動になってしまうと制限があるということで、こういった密接な関係の中で、更に飛躍できるということは非常に嬉しいことではあります。

逆にこうしたことがプレッシャーにならないように、基本的なコンセプトはワインを楽しむ宮田村の素晴らしさを感じてもらうことが、このセミナー、この活動の1番の基本ですので、栽培者の人たちも自分はまだぶどうを作っていればよいという考えがあったのですが、ここのワインセミナーができたことによって、ワインのことに興味を持った人が多いんだということ、最近実感してもらうようになりました。そのおかげか、そのワインセミナーの受講者の中にも、ぶどうの栽培者の方が積極的に勉強しようとする意識が生まれてきております。その一助にこのプロジェクトがなればよいと感じております。

(鈴木 氏)

事業を採択してもらったことが地元の新聞に載ったところ、公民館の講座に仕事を退職したおじさんたちがおやじ塾というのを作っているのですが、3年して独立して活動している方々から、「新聞で見た。俺たちもワインのことを学びたい」と、つい一昨日、おやじ塾ワインセミナーを開講させていただきました。熱心に学ばれて今度ワイン祭りにも行きたいとか、ワインを飲む時の知識に役立てたい等、広がりを見せております。先ほど志村さんが言われたように、ワイン会に行く等の活動の場はあるのですが、プレッシャーにならないようにしています。決定したのが9月頃ということで、スケジュール的には今大変なところもありますが、楽しみながらということ、私の方でも気を付けながらやっていきたいと思っております。

(木下委員)

ワインセミナーのことは、前から承知していましたが、公民館はもともと戦後草創期の活動のひとつに産業振興という言葉はあったのですが、実際に私の知ってる範囲で、産業振興に結びついた活動は少ないと思います。そうした意味ではとても画期的な事業だと改めて感じさせていただきました。

1点教えていただきたいんですが、文科省の補助事業を飯田市もやっているのですが、来年、

再来年、どのように展開していこうかと考えているので、その点をワインセミナーの活動からヒントをいただきたいと思います。どのようなことを考えていらっしゃいますか。

(鈴木 氏)

来年以降については、必要な物品等はそろっていますし、セミナー自体は続いていきます。引き続きレシピを作るという取組はあるので、そうした部分を変えていく、更新していくという必要があればしていきたいと思います。まだ具体的な案はもっていないのですが、今年で終了になるのか、来年もまた経費等の問題も含めて継続ということになるのかどうか悩んでいます。

(木下委員)

志村さんに教えていただきたいんですが、仕事でワインの製造にかかわりワインをどうするか考えてこられたと思うのですが、今回公民館と組んでこうした広がりが見えたと思うのですが、志村さんご自身こんなことをしてみたいということを考えておられるでしょうか。

(志村 氏)

発足当時から6年、ワインセミナーの講師を務めさせていただいているんですが、先ほど鈴木さんの方からお話がありましたけれど、非常にワインの好きな中高年層が、日本ワイン検定を受験して、実際日本ワイン検定2級を合格する等、自発的な行動をしており、私としては非常に嬉しく思っています。私もこれからのワインセミナーのことを頭に描いているんですが、こうした方々がワインセミナーの講師になってつながっていくことが、今後の宮田村の発展のためには、大事だと思います。いつまでも私がやっていくわけにはいかないですし、むしろそうした流れになっていくことが理想的じゃないかと考えています。完全に手を離れるのではなくて、私も推進会議のメンバーでもありますので、オブザーバー的な立場から協力できればよいと感じています。

(土井会長)

ワインセミナーは修了試験がありますが、そういうことをクリアしてワイン検定等につながっていると思いますが、宮田村公民館の講座では、ワインセミナーの他に試験があるのでしょうか。試験をすることによって社会的にも認知され、社会に貢献するという道が開かれるのでしょうか。社会教育における試験制度についてどのようにお考えですか。

(志村 氏)

このワインセミナーは、ただワインを飲むセミナーではありません。公民館活動の中でやっていますので、絶対に修了試験はやらないといけないと感じていました。だからといって難しく考えていただかなくても結構です。試験の前の月、2月のセミナーでは、ここが出ますというのをやりますので、2月の講座は出席率が高いです。本当に難しい問題を出すわけではありませんし、「もし、みなさんが県外の知人に『紫輝』をPRするとすればどのようにしますか」といった文章問題も出しますので、みなさんそれぞれ考えて書いてくれますし、それが私たちの販売促進にもつながるよい情報になることもあります。全然落とすつもりはありませんし、

みなさんが笑顔で合格できるように問題を作っています。

(鈴木 氏)

公民館の講座の中で、修了試験があるのはこのワインセミナーだけです。志村さんが言われたように毎月1回の講座を1年間やって、次の年にいく。試験があるのかというみなさんもいますが、志村さんからフォローしていただき、絶対不合格ということはありませんと言ってくださっています。「この年になって試験か」という昔を懐かしむ声も聞かれます。受講する前提が12回のうち6回以上の参加という出席点があり、それだけで結構な点が入ったりします。女性のみなさんもお忙しい中、月1回講座の参加に都合をつけていただいています。やはりそういった意欲のあるみなさんにとって、試験をして修了証がでるとするのは嬉しいことだと思います。

(土井会長)

村の産業振興と社会教育がうまく結びついた素晴らしい実践をご発表をいただきました。鈴木様、志村様本当にありがとうございました。

3 実践発表・意見交換②

(伊那市高遠町総合福祉センター)

「伊那市高遠町公民館の取組について」

伊那市高遠町公民館館長 原 和男 氏
ジオパークガイド 矢澤 章一 氏

(土井会長)

発表いただく前に、県で策定しました「第2次長野県教育振興基本計画」について、生涯学習・社会教育に関連ある事項を中心に、事務局の方から説明願います。

※事務局説明 資料4による

(土井会長)

※それでは「高遠町公民館の取組について」ご発表をお願いします。

※伊那市高遠町公民館館長 原 和男 氏、ジオパークガイド 矢澤 章一 氏説明
資料2による

(土井会長)

それでは、しばらくの時間ご質問等をお受けして、更に理解を深めていきたいと思います。

(矢澤 氏)

お手元に南信州ジオパークガイド攻略本を配付しています。これは私どもが資料としてまとめたものですが、対象は小学校3・4年生以上ですので、ルビをふって子ども達が読めるように

作ったものです。この本をご覧になっていただきますと日本列島がどのようにしてできたか、わかるようになっていきますのでお読みになってください。

(土井会長)

精力的に取り組んでいる様子がわかります。お聞きしたいことがございますか。

(伊藤教育長)

様々で多彩な講座内容を教えていただきました。学び合いというか、様々な得意分野で町民のみなさんが講師になって、ある時は教わり、ある時は教えておられると思うのですが、実際参加者について、おそらく課題になるかもしれませんが、子ども達の部分と比較的高齢の60歳以上の方の参加を見込まれていると思いますが、30代40代50代の方々の参加はどのようなかお教えいただければと思います。

(原氏)

ご指摘のとおり非常に悩んでいるところでございます。子ども達も高齢の方々も、参加してくれるわけですが、PTA世代の方々がなかなか忙しいということで、参加が少ないです。進徳館ではお母さんと一緒にどうぞとお勧めしているわけですが、桜大学講座にはPTA世代の集まりが少ないということが、課題にもなっております。公民館としては、講座とは違いますが、PTA世代が集まるのは、スポーツ大会の交流の場面があります。チラシの中にもありますが、例えばソフトバレーボールリーグ戦「桜カップ」というようなものもやっています。5ヶ月間に渡ってリーグ戦をやるのですが、その時にはPTA世代の方々も参加し交流を深めているのですが、今お話しした講座にはそうした方々が少ない。そういう方々が引き継いでくれないとこれからの高遠の歴史・文化の伝承ができないと思いますし、「私たちお嫁にきた人はよく知らない」という言葉もございます。チラシ等を差し上げているのですが、そのところが難しいところです。ただ、子ども達を一生懸命育てていくことで、継承者が出てきてくれればありがたいと思います。

子どもたちに何とかこの高遠の歴史を知って、愛着を持っていただいて「高遠を好きだ」という子どもたちを増やしていくことで、何とかなるのではないかと学校と相談しながらやっているところです。非常に苦しんでいるところです。

(南沢委員)

お城を攻める体験の企画をお聞きして、本当にたくさん子ども達が体を使って楽しんでいることがわかりました。私たちも参考にさせていただきたいと思います。

また、「進徳館 夏の学校」に小学生が77名も参加というのはすごいと思いました。私たちの地元でも同じような催し物がありますけれど、4日間同じ子ども達が参加するわけですね。それで77名というのはすごく多いと感じています。どうしたらこんなに参加してくれるのかと思いました。

(原氏)

最初は50名ぐらいの参加者がだんだん増えてきました。学校の先生のご理解が一番の原因になっています。学校にお伺いをしまして、無理のない程度で参加を進めていただくわけですが、

この事業に対して校長先生、教頭先生はじめ、先生方が非常に積極的に家庭に理解していただくように努めていただいていることが、一番大きいかなと思います。それから、子どもたちが家に帰って論語等を唱えることがあるようで、そんなことを通して家の方の支援をいただいているところです。

子どもたちが来てよかったと思って帰ってもらうようにしています。休み時間に子どもたちはどんなことをしているかという、進徳館には笹があり、それを使って笹舟のつくり方を教えてあげて、タライに水を張って子ども達はそのタライの上に、舟を浮かべることが好きなんです。論語とか何か古いことをしていますが、子どもたちの気持ちは笹舟にもあるのかなと思います。蟬のとり方等の話をたくさんしてあげるのですが、子どもたちも喜んで面白がって聞いてくれます。

あまり固いことばかりやっているのではいけないですが、礼儀をしっかりとできるようにしましょうとよびかけています。子どもたちは言うことをよく聞いて、くつも揃っていたり帽子もきちんとかけられていたりして、参観に来られた方がびっくりするということがありました。いろいろなことで楽しく終わることができるようにしています。

学校の先生のご理解が一番大きいと思います。

(山本委員)

昨年の9月までこちらに住んでいました。高遠は個性的な町、それは歴史がそうしたことを育んでいると思います。

高遠町の公民館は専用の建物がありません。この総合福祉センター「やますそ」の建物は公民館ではありません。そうした中で、原館長さんはじめ職員のみなさんが頑張っている姿を見ながら、素晴らしい事業を展開しているということを、常々感じていました。そうした意味で、専用の公民館の施設がない中で、これだけの事業を進めている原館長さんはじめ職員のみなさんにエールを送りたいと思います。

4 協 議 「生涯学習・社会教育の推進における県の役割について」

(伊那市高遠町総合福祉センター)

(土井会長)

午前中の宮田村の実践、その特徴は農業であり、農産物を生産、それを加工販売し、それを学ぶという6次産業と言われている取り組みをお聞きました。そして、ただ今は高遠町という伝統のある城下町、そこにある公民館講座「桜大学」が営々とつながっている。子ども達が進徳館で、昔の様子を現代に映しながら学んでいる。中央構造体の話等素晴らしい実践をお聞きすることができました。

私たちは生涯学習審議会委員として7名参加させていただいておりますが、私どもの使命は、県が生涯学習、社会教育をこれから推進されていく上での役割は何か、県は生涯学習、社会教育を推進する上で、どういうことをすればよいか、焦点を当てて協議することが求められています。そういう意味で、本日の実践報告を踏まえながら、忌憚のないご意見を出していただ

くことをお願いします。

(中村委員)

昨日まで考えてきたことと、今日実際にお聞きしたことを含めると、少し思っていたことにずれがあるかもしれませんがお話したいと思います。

私はここ3年間こうした視察に参加させていただいていますが、規模は各市町村違いはありますが、地域にあった取り組みを見せていただいています。県の役割についてですが、そんなおこがましい指摘等はできませんが、今の社会の状況等を考えて人口が減少していく中で、いろいろな社会環境の変化、特に私は労働団体ですので雇用の状況とか、職業的には保育士ですので幼児教育を含めてお話できればと思います。

やはりこういう状況の中では、生涯学習とか社会教育という分野では、それぞれの人が自立して規範意識等を持って、他の方といろいろなところで協調しながら、生涯を通じて生きる力を身につけていけるということが大事ではないかと思っています。地域の方とか、住民の中でのお互いに学び合ったり交流したり、今みなさんを見ていても、求められているのは能力を高めたいという思いがすごく、ニーズが多様化するとともに高度化しているのではないかと考えております。そういう意味では、今日のワインのように専門分野も極めていくには、指導者というか養成する側としては大変ではないかと思っておりますので、講習会で講座を修了した方が次の講師になっていくということを伺って、そういう動きや流れが、地域の中ではとても大事になるのではないかと考えています。やはり今財源的にも人を配置するということが、コスト削減と言われている中、人材の宝庫というのがありますので、活用していければよいと思いました。

学校とか幼児教育は大事なので、幼保小の連携が大事だと思いますし、子育て支援のあり方1つにしても、市町村の中で雇用とか雇用の形態とか、共働きでお母さんが夜遅くまで働いているとか多いので、そういうことを踏まえた関係部局との連携というのでしょうか、教育委員会だけでやるのではなく、労働雇用等いろいろなところと連携を取って示唆ができればよいと思います。学校等では、子どもさんが就職等する際に、職種などなかなか知られてなかったりする中で、地域の企業の協力を得て、キャリア教育というだけでなくいろいろな体験をするとか、協力いただければと思います。連合長野ではいろいろな取り組みをしていますが、ろうきんが若い高校生を対象に、お金の使い方とかマネートラブル、クレジットカードの使い方等について興味を持ってもらうように、そういうことを出前講座的にやっています。そういうものも活用していければ、いろいろな連携ができるのではないかと思います。

その他、保育園では、学校と地域が連携して向上していかれるということでは、保育体験ということで、地域の子育て中の若い親御さんに学校に来てもらって、生徒さんと赤ちゃんとのふれあいを楽しんでもらったりしています。親御さんが育ていくために、親御さん向けのいろいろな集い等をやったり、保育参観や学校参観、先ほどPTAの方の参加が少ないということがあったんですが、それも課題だと思うのですが、企業の方には若い子育てをしている家庭への支援という形で、企業でも社員に学校参観日に極力行ってもらえるように、1年を通して取り組んでいるところもありますので、そういうPTA活動でも工夫していけるとと思います。

この間、テレビでやっていたのを見たのですが、NPOの方などと協力しながら塩尻のワインの歴史等が発信されていました。その内容として、美容院で待っているとき、お客さん同士や

お客さんと従業員の方々のコミュニケーションにも利用され、とてもよい感じでした。これからは発信ということが大事ではないかと思えます。

先ほど周知するということがありました。やはりテレビで取り上げていただいたり、利用者の笑顔を見たり、スタッフの方が頑張っているということ発信してもらおうと、ちょっと行ってみようということがすぐに伝わってきます。県の方々もそうした催し物に積極的に参加していただき、今度は情報発信するとか、評価していくということが大事じゃないかと思えました。

それから具体的に考えていくのですが、私の住んでいる小布施町では「青ペン先生」という取組があります。小中学校が1つしかないのです、その中で中1の壁というものがあり、結構みなさんの課題になっています。それを克服するための工夫なのですが、小学校の5、6年生にプリントの問題を出して、中学生が青ペンで採点・添削して、「ここは頑張ったね」「ここはもうちょっと、こうしたほうがいいよ。」というような交流ができているという取組があります。2年目なのですが、そういう実践等も、地域も関わっていてよいのではないかと思います。

(三澤委員)

先程のワインのことも、農業を通じた活動ということで大変勉強になりました。私も県の半年間の講習を受けて、「農村生活マイスター」という資格を持っているのですが、その仲間でほんとにわずかなことなのですが、小学校でお豆腐作りやお餅作り、それから伝統や季節のこと等をいろいろ教えています。県内の小学校2年生はお豆を作って、それを活用して勉強するというをやっているようで、お豆腐作りのお手伝いだけに参加しているのです。大豆の大切さについては、学校の先生方が教えてくださっていると思うのですが、これから生きていく上でいろいろな災害があった時、食べ物をどうやって食べていったら生きていけるかということをお話してあげたいと思っています。でも、私たちが長年自分たちで会得してきたものを教えてあげる時間がないんです。豆腐を作る2時間の授業だけでは、そのことを教えてあげる時間はありませんし、児童館等でおやつ指導等をしているのですが、やはり時間がないのです。

ですので、先生方一生懸命いろいろなことを教えていますが、何か授業自体にゆとりがないように外から見えます。子ども達にはゆとりという息が抜ける時間が必要であり、こういうもので将来役に立つ学習だけではなく、体験させるという授業がもう少しあってもよいのではないかとこの頃感じております。

(北林委員)

今日の研修は、私は飯島町ですので地元でやっていただけるということで、とても楽な気分です。私が県のみなさんにどんなお話ができるんだろうかと考えていますが、地元でやらしていただきましたので、気楽に自分のことをお話させていただければと考えております。いろいろ考えましたが、最近「人が宝だ」ということを思いまして、先日は私も上伊那のPTA役員になぜかなってしまい、今年は県大会の運営を先日やらさせていただきました。その中で市町村のPTA会長さんが「どうせ会長やったんだから、ここまでやらしてもらってよかった」「よい経験をさせてもらった」とおっしゃっています。私なんか偉そうにお願いすることを黙って「ハイハイ」と聞いてくださっていて、そのようにおっしゃっていただき、みなさんのおかげで私の係の仕事が無事終わりました。

その他、今学校に「地域の先生」という形で、調理のお手伝いに行かせていただいています。今度中学校が陶芸をやってみたいということで、私が教えてもらっている先生がいるのですが、どうせならみんなで中学校に押し掛けましょうということで、私も一緒にやっている仲間として誘っていただき、中学校のほうに行かせていただきました。PTAではない立場でも学校に行かせていただくというのは、やっぱり教えていただいている先生が誘ってくれなければ行かれないということ、この先生のお陰だと思いました。

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、中川村、飯島町、駒ヶ根市、宮田村の4市町村で、「信州伊那里泊覧会 イーラ」というものを開催しています。そちらにも実行委員として参加しています。昨年から本格的に参加させていただいているのですが、それは先程の話と同じで、地域の先生方が自分の技術をみんなと一緒に伝えたいという目的でやっています。ゆくゆくは仕事にもつながればというような形で進めています。先生を発掘するということで、やはりこれも人のつながりで、「あそこにあんなことができる人がいるよ」というようなところで大事だと思います。今1番人気があるのは漬物の講座です。地元のおばちゃん5人が鉄砲漬を教えてくれるという講座は、募集一日で定員に達するという勢いです。やはりこれも地域の方々、「私の漬物なんか」と言いながら、でもやってみたら結構楽しいということで3年間やったださっています。単発でも対応してくださいます。終わると、「大変だった」「もうやらない」とおっしゃるのですが、やっぱり人と会えたことが楽しかったということで、次をやったださっています。そんなことで研修会とか発表会とはちょっと違うかもしれませんが、自分のやってきたことをいろいろな方に見ていただいたり、おだてられたり、認められたり、そういう機会があるということが、やっていく上で張り合いになると感じます。大変だったけどやっぱり楽しかった、高遠町公民館の館長さんがおっしゃっていましたが、楽しかったと終わることがいちばん大事ではないかと思います。県なのか市町村なのか分かりませんが、研修会とか発表会とかいった場を、小さいものでもよいのでたくさんそうした機会を作っただけだと嬉しいなと思います。

(木下委員)

飯田市で社会教育をやっております。大きく2つお話をしたいと思います。

1つは是非取り組んでいきたいテーマです。それは「次世代の育成」というテーマかなと私は思っています。小中学生の義務教育の子ども達に限らず、高校生、それから高校を卒業した若者達、そこを全部広げた次世代なのですけれども、少子高齢化の時代ですが、高齢者に関しても、次世代育成の取り組みにそういう人たちがつながって、高齢者のみなさんの自己実現にも結びつける等して、次世代だけの取組ではなくて、次世代の育成というテーマにこれから地域をあげて力を入れていくことが必要と捉えています。

飯田市の取り組みを少し紹介しますと、飯田市は基本計画の中でも人づくりに大変力を入れていますが、中でもこういうスローガンを作っています。「帰ってきたいと思う人づくり」です。これは就職や進学で地元を離れることが、むしろあってもよいと思いますが、あったとしても、その後いずれは地元飯田市に帰ってくる、そういう人を育てられたらと言うことです。飯田市は小学校区単位に公民館があり、今20余の公民館がありますから、小・中学校とのつながりは強い。これは誇れるだけの強さを持っていると思いますが、高校生というのが、今の私たちにとっては1番の関心の年代層です。

実は2つくらいの新しい取り組みをしているのですが、1つは飯田O I D E長姫高校という、この4月に2つの高校が統合してできた高校ですが、統合前の商業科の生徒たちの授業を、学校の先生達と作っておりまして、1年生から3年生までの授業をずっと作っていて、延べ600時間ぐらいの授業を一緒に行っています。その一番の目的は、商業科の生徒達がこの地域のことをよく知って、好きになって、何かこの地域の役に立ちたいと思えるようなことを学んでもらうという教育活動を、先生達と一緒にやりましょうということで始まりました。

それからもう1つは、高校を特定せずに飯田市や下伊那地域の高校生全体を対象に高校生講座を、もう7、8年取り組んでいるのですが、今年は3月にカンボジアにスタディツアーに行く生徒を募集しております。なんでカンボジアかといいますと、実は飯田のことをしっかり学んでもらうということが裏の目的にあって、1つ芯を作るという意味で、内戦の中で混乱の中からもなんとか立ち上がろうとしている国に行ってみて、自分たちの暮らしている地域のよいところを振り返るというテーマ性を加味してやっています。そういうことを通じて高校生をどう育てるかということをやっています。なかなか県立高校ですから、市町村立の私たちの機関と結びつくというのは難しいところがありまして、地域の学校との連携というのは、やはり小・中学校は市町村立ですから割合と、まだまだ難しいですけどできるのですが、高校との結びつきをどうやったらよいかということに、県が上手につなぎ役になってくれるととてもありがたいと思っています。

今度は、県の役割、スタンスという意味で、私の希望をお話し申し上げます。今日の2つの地域の取り組みは素晴らしい取組で、高遠の矢澤さんは80歳半ばぐらいですけども、どうしてこんなにお元気なのかびっくりしたんですが、矢澤さんは公民館の職員ではなく地域の方じゃないですか。やはり社会教育というのは、そうした人たちが表舞台に上がって行くことがどんどんできていく。ワインセミナーでも志村さんが言っていたように、受講者が講師に変わっていくという、そのところに社会教育の大事なところがあると思っています。

それともう1つ、そういうことに直接かかわるのは市町村だと思います。なかなか直接県がかかわることはないと思いますが、今日の話題には出ていませんが、いじめや不登校、ニート等のいろいろな社会的な問題にアプローチしていく取り組みは、県内にたくさんあると思っています。公の機関に限らず、教育分野に限らずあると思うんですが、そうした取り組みをしっかり掘り起こして、県民のみなさんが共有できる仕掛けというようなものができていくとよいと思います。この生涯学習審議会が、昨年も今年も現場で素晴らしい取り組みを生で感じる試みをされていること自体が、そのスタンスと実は思っております。民間で「子ども白書」を県内で作っていますが、結構辛口の白書なのでこういうことは県ではできないと思っております。白書みたいな形でしていくということもあるかもしれませんし、先程お話しいただいたんですけども、交流の場面を用意いただくとか、同じような取り組みをどこかでつないでいただいて、お互いの活動の参考にするというような、そういうつなぎ役みたいな活動を県でやっていただくと私共もありがたいと思います。

(南沢委員)

生涯学習、社会教育、公民館活動と言われていましたが、一番参加が少ないのがPTA世代ということで、公民館活動はあまり自分に近くなかったのですが、自分の周りの公民館活動を見た時に、失礼な言い方ですけど、公民館活動というのは、時間がたくさんあるリタイアされた

方や家で子育てされている方たちのためのものと思っているところがありまして、そういう風に思うと、義理の父母も公民館に出かけて行って、そこで楽しそうにして帰ってきているので、とてもよいことだと思っていました。

でも今日話を聞きまして、それだけではなく、私たちも参加しなくてはと思いました。自分の活動と重ね合わせてみますと、私の住む千曲市では、地域の食材、農業と食生活を、やはり次世代の子ども達に引き継いでいきたいと言うことで、市の農林課が先頭に立って、会を立ち上げています。やはり集まってくる人たちは、若くて60代、70代、80代の方、その人たちが子ども達にとっても世代の差がありすぎて、自分のお孫さんも大きくなってしまったようなみなさんが割と中心になっていますので、学校の中にもなかなか入っていけないということもあります。私も誘われてそこに入ったんですけども、PTA世代だからだと思んですけど、原館長さんもおっしゃっていましたが、子ども達に参加してもらうには学校の先生方の協力が大きいということで、なかなか地域の一員として何か学校に活動を持ちかけるということは大変だと最近思っております。もちろん積極的な先生方もいらっしゃいますし、受け入れていただけることもあるんですけども、学校というのはどんどん先生方が異動していきます。協力的な先生方がいらっしゃった時はよいんですけど、先生が異動していなくなってしまうと、なかなかその学校に根付くということは難しいということを最近思っています。学校と地域と保護者と言われていきますので、保護者も地域の一員ですので、PTAを終わらしても、地域の1人として関わりたいとすごく思うんですけど、なかなか実際は難しいと思っています。私のところでは県の役割についてということは、難しく申し上げることは出来ませんが、よろしいでしょうか。

(山本委員)

秋になると社会教育の場合はいろんなイベントがあって、社会教育に携わる人たちは忙しいんですが、私の立場からすると、全国のいろいろな大会に参加する機会があって、この先々週は北海道で公民館大会が、先週は社会教育委員の大会が三重県であって、一昨日は図書館総合展が横浜でありました。行く先々でいろいろ刺激を受けたり、普段感じていることが確かにその通りだと、我が意を得たりという部分もあったりします。更に言うと、こういったところは叱咤激励されているのかなと思いつつながら、この2週間を過ごしてきましたが、その中で議論されたことをご紹介します。

今お話の中で、保護者も地域の中の一員だというご発言がありました。よく学校・家庭・地域の連携というトライアングルの形の絵を見ることがありますが、そうではないのではないかとおっしゃっていた方がおられました。私も確かにその通りだなと思いました。要は、地域があって、その中に学校があって、家庭があるということです。学校と家庭と地域がトライアングルの関係ではなくて、地域の中に学校があり、家庭があるということです。そういうことを考えると、地域がよくならなくて学校はよくなるはずもないし、まず地域がよくなって初めて学校もよくなるし、家庭もよくなるんだという話を聞きました。その際戦後ずっと右肩上がりの時代があって、ともすると自分たちの地域の子も達をよい成績を取らせた結果、結局地域の外に出すような育て方をしていたのではないかという話もありました。社会の風潮もそうだったと思うのですが、とにかく学校でよい成績を取って、結局、地元に残らずに、象徴的な言葉で言えば東京に出ていくような人材を育ててきた。その結果どうなったかということ、それぞれ地

域が抱えているような課題、少子高齢化の中で過疎という問題を起こしたという指摘をされてきました。そうすると、今一度、そういう子ども達の育て方、それでよいのかどうかということ、地域にいる我々一人一人が考えていかなければいけないということです。これからの時代は、まさに自分たちの地域を活性化させるためにはどういう人材を育てていくのかといった観点で、子育ても考えるべきではないのかということです。

今回高遠の公民館の取組をお聞きして、そういう思いを強くしたんですけれども、進徳館教育を、社会教育の分野でやっていこうと。学校教育でももちろん取り上げられていると思いますが、社会教育の場面で非常に強烈に伝えようとしているのが、高遠の取組だと思えます。そうした中で学校でもご協力いただいたという話も、原館長からありましたが、高遠ではこういう子どもを育てるという強烈なメッセージがあって、それに対して学校が、あるいは家庭がどういう形で取組んでいくのかという観点で進められていると思えます。

長野県全体を見渡して、更に全国的なところをも比較して感じるのは、長野県はやはりそれぞれ各市町村の個性、今日も宮田村の話をお聞きしましたし、高遠もこういうような強烈な個性がある。そういう市町村で成り立って長野県が形成されているのかなと、私も長野県に2年少し住んで感じました。そういった意味では、県として長野県社会教育はどうなんだということは、なかなか一言では答えづらい部分があるのではないかと思います。先程お話が出ていたと思いますが、社会教育の第一線は市町村にあるので、市町村に対して何ができるのかという切り口で県の役割というものがあると思えます。長野県は大きな県なので、私は教育事務所の役割がとても大きいと思っています。ここに住んでいて頼りになるのは伊那の事務所ですし、県庁まで行くとなると距離的にも大変だという部分があるので、やはり教育事務所の役割を、権限移譲することを含めて事務所の役割が大きくなっていったらどうかを考えます。

ご案内のとおり社会教育主事の数が随分減ってきているわけですが、それには合併の影響もあると思えます。その時に、市町村の中で社会教育が抱えている課題を克服できない時に、事務所の支援があると随分違ってくると思っています。最近、私の職場の方から各県に調査を流させていただきましたが、教育事務所単位で市町村を支援するにはどうしたらよいか、我々も研究し始めたところなのです。具体的にどんな支援をするのかということですが、例えば伊藤教育長が文部科学省にいらっしゃった時に立ち上げたこの公民館の事業ですが、今までやっていなかったことが逆に不思議なぐらい地域に定着しやすい事業だと思えます。そして3年経った後に、その市町村はどうするのかと。宮田村の予算積算が出ていましたけども、その予算がなくなった時どうするのか。そうなった4年後、10年後を見据えて事業を取り組んでいったらどうでしょうかということ、教育事務所の方からご指導いただけるとよいと思っています。

私がここに住んでいた時、高遠町で本のまちづくりをやっていました。県の補助金がなくなってしまうたら、活動が下火になってしまいました。せつかく本のまちづくりという形で芽が出たので、補助がなくなってからも、自分たちの身の丈にあった活動をしていこうということで、昨年辺りから高遠町で活動が始まっていますが、事務所の方からも連携を取りながら高遠町に指導していただけると、長期間の継続性を持ったまちづくりができるのではないかなと感じていたところでした。更に言うと、各委員の方々から人の暖かさとか、人材育成の話があったと思えますが、研修の重要さもあるのではないかと思います。私のところでも研修事業をやっていますが、旅費もなくなかなか参加させられないという声をよく聞きます。事務所の単位で研

修にウェイトを置いていただいて、わざわざ東京に出なくても県の教育事務所の単位で、研修事業が充実することができるような対応もしていただけるとよいかと思います。

(土井会長)

私からは、三澤委員が「農村生活マイスター」という資格をおとりになっているということで、その資格は農政部が行っているのか、その活動範囲は長野県内ならどこでもよいのですか。

(三澤委員)

活動範囲は長野県内ならどこでもよいと思いますが、やはり地元の活動をするというのが基本です。

(土井会長)

資格を活用されて小学校で大豆の栽培なり加工の支援をしていらっしゃるいろいろなお気づきの点をお話をいただきましたが、今日の午前中のお話をお聞きしまして、セミナーの修了試験をして更に国の資格にも挑戦する人がいるということで、その人がゆくゆくは講師の先生の代わりをしてほしいと思っているというお話がありました。こういうワイン資格等は国が作っているんでしょうね。県のレベルで学んだことをワインでは試験をするとおっしゃっていたんですけども、何か県で資格を付与する、学んだことをちゃんと評価する、その力を活用してその地域で貢献してくださいということでバックアップをする、人材づくりのために生涯学習講座で学んだことを、長野県がなんらかの形で評価してそれを認めるそういうことができる地域貢献がしやすくなるのではないかと思います。今お聞きした県の農政部の活動、「農村生活マイスター」という資格を得たこと、これは農林行政の中で取得されたものですが、それが学校の中でも生涯学習の中でも貢献できている。生涯学習を県が全県にわたって振興しようとする時に市町村からは導入できないものが、県庁の中の他の知事部局の行政と生涯学習の行政をつなげて県民が自分たちの地域でちゃんと県のお墨付きが付いた活動ができる、これが一番ありがたい役割ではないかと、県ができることではないかと、県民の学習のレベルを上げていく道ではないかと思った次第です。

(南沢委員)

山本委員のお話を聞いて、公民館として子どもをどう育てたいのか、是非自分のところでもやってくれたら嬉しいなと思いました。

(木下委員)

こういうことを言ってよいのかと思うのですが、山本委員の話をお聞きして思ったことですが、私が公民館の職員になったのは今から30年近く前になります。当時は学校の先生方が派遣で市町村で大勢いらっしゃっていました。市町村で社会教育主事を養成することが難しかったので、その先生方の力がとても大きく、地域の力をつけていくのに有効に働き、地域の活動がとても盛んになったのですが、今は引き上げということでそうした制度はありません。実は私が親しくさせていただいている校長先生が、結構当時派遣でいらっしゃった先生方がおられます。当時のことを懐かしんで話すこともあります。実は先生方にとっても市町村の社会教育

の現場で学んだこと、実際にやられた経験が大事な蓄えになったと思います。先生方のモラルの問題も出ていますが、飯田の公民館の主事たちもそうですが、地域の方達と一緒に積極的に関わりを持つことで、市民の方達の生活感覚や価値観とかいろんなことを学んでバランスのとれた職員になっていることがあって、それを考えると市町村にとって派遣の先生達の存在が非常に大きかったとともに、先生方にとってもその経験が教師としてのその後の資質を高める大きな要素になったと思っています。予算が伴うのでなかなか難しいと思いますが、そういう制度は形を変えてでも県の方で検討していただくとよいと思います。

(北林委員)

高遠町の本のまちづくりは、県の補助金がある時にはよい活動ができていたと言いますが、それは「イーラ」の取組でもそうですが、補助金をいただいた時にはとっても元気にできるのですが、補助金がなくなると活動できなくなる。それまでに自分たちで力を付けていかないと活動ができなくなるということがあると思います。身の丈にあった縮小した事業の形をとって行かなくてはいけなくなるということがありまして、その辺で市町村も応援して下さっていますし、県の方でも応援いただいたりしているんですが、現実問題どのようにしていくとよいのかなと思います。簡単なよい策というか、こんなことがあるじゃないかというようなことを相談に乗っていただけるとありがたいと思います。補助金に頼っているだけではいけないのですが、色々あってその補助金があってできるということもあるものですから、その後の自立の仕方ということについてご指導いただけるとありがたいです。そんなことを山本委員のお話をお聞きして思いました。

(中村委員)

市町村の生涯学習推進体制の整備を促進するということで、県の方にはお骨折りいただければと思います。研修の重要性を感じております。惜しみなくお金をかけていただきたい、その辺をお願いしたいと思います。その他、大学等との連携、市町村でもできればよいと思います。小布施町では若者の会議を開催して2年目になりますが、100名ぐらいが地域にホームステイできる体制をとっています。そういうところでは障がい者の方、若者に発信をしてもらって小布施町としても未来に向かって取り入れられそうな提言をいただいているので、都会でも悩んでいる人たちが地方に来てどうかという、地方のあり方みたいなものまで追求できたらというので続いていると思います。その他、高遠町の本の関係では先進的な取り組みを参考に、小布施町ではどこでも町中図書館をはじめまして、カフェや空いている古民家等どこでも図書館みたいな本を置いて気軽に立ち寄れるようになっているので、そういう先進的な取り組みをしているところを情報発信していただいたり、そこに研修に行こうという今日のような取組を提供していただければよいと思います。

(三澤委員)

私自身を振り返ってみますと、私が住んでいる安曇野市では、いろいろな各地域で歴史があると思うんですが、あまり関心がなくていけなかったなと思いました。地域の公民館の役員としては7年に一度回ってきますから、それなりに地域の人とは交流をしていますが、大きな意味での公民館活動、生涯学習という点ではちょっと参加が足らなかったかなと思っています。

スポーツだけは公民館の助けを借りまして30年間やってきましたけど、ちょっとこれから考えたいと思います。

(山本委員)

ここに住んでいた経験で申し上げたが、高遠北小学校の児童数が61人だったのですが、そこで委員会の名前は忘れてしまいましたが「安全を守る会」という会があって、参加いたしました。その会には、地域の人たちが40人ぐらい集まっていました。61人しかいない子どものためにそれと同じ位の大人が集まってきて、子ども達の安全を考える。教育に対する思い、子どもに対する思いが長野県はとても強いということを改めて感じたのです。ですからこうした取組を地域に応用できるような仕掛けや仕組みはできないか、役所の中で皆でどうしたらよいかと言ってもなかなか出てこない知恵ですので、いろいろな人を交えてどうしたらよいか、ああしたらどうだろうかと、いろいろな人たちを巻き込んで論議する場を設けることが大事だと思います。土壌としてはハイレベルなものが長野県にはあるので、後はみんなが知恵を出し合っただけでどういうふうにしていくのかということが大事だと思います。

1つなるほどと思った事例を紹介します。その町では大豆を作っています。大豆の収穫は子ども達にさせますが、よい大豆と悪い大豆がありその選別を老人ホームに持っていってお年寄りのみなさんにやってもらうのです。そうするとお年寄りのみなさんにとっても社会の役に立っている、地域に貢献しているという経験を持つことができるのです。こうした仕掛けは、いろいろな人たちの議論の中で生まれてきた知恵だと思うのです。ですから、いろいろな人たちを巻き込んでまちづくりをしていけたら、そうした仕掛けがあるとよいと思います。

(土井会長)

今各学校では職場見学等、職場体験等のキャリア教育に取り組んでいると思います。恐らく10数年前からこの取り組みが行われ、各学校ごとに各域内にあるお店や工場・商店等様々なところに体験活動として入っていると思います。今回宮田村の実践をお聞きして、生涯学習、公民館主事の担当者が企業と連携している、村全体が特色ある作業を育成している、10年前からぶどう栽培が始まっている、そうした村の企業の動きと社会教育をつなげていくここがうまく成功したと思います。今日いただいた宮田村を紹介するパンフレットが入っていたんですが、それが他のとどこか違うのです。企業や商店を紹介するページがあるのです。普通は、「食べ物屋さんがあります。ここが見学できます。」なんですが、宮田村は、「こんな会社がある。商店がある。」ということが書いてあるのです。宮田村では、こうしたパンフレットに掲載されてくる素地として、こんな企業があるとか、村の中の商店とかを公民館が全部把握しているのです。これからもいろいろな場面が出てくる時に、県のレベルで、こういう範囲では許されますというように市町村を応援する、そういう役割をやっていただければよいと思います。企業の中でも土曜日などに職員がジャンパーを着て、ただいま清掃していますと行ってゴミ拾いをしています。地域貢献、社会貢献としてやっていらっしゃいます。そういうものの1つとして我が社をどうぞ見学してください。工場見学をオープンにするところもあります。子ども達だけがキャリア教育を行うのではなくて、大人達も我が地域にある会社を訪問して、また宮田村のように公民館講座に来てもらう。県の立場からこういうことはよいことです。企業の営利活動ではありませんというお墨付きをいただくことはよいのかなと思います。

(伊藤教育長)

今日の審議を通じまして、私ども様々のご示唆をいただきました。私は長野県の教育長になる前に文部科学省の方で社会教育を担当する課長をやらせていただきました。その中で長野県の公民館は全国トップクラスの活動をされているということを知りました。また長野県は公立図書館の活動も素晴らしい。先程委員の発言にあった小布施町の図書館は2年連続全国ナンバーワンという評価を得た。そして、今年は伊那市高遠町の図書館が全国ナンバーワンの位置についたということで全国的にも素晴らしい実践がされているところでございます。

それは長野県の社会教育ではなくて、小布施町であったり、伊那市であったり、飯田市であったり、松本市であったりと、市町村での取り組みなわけです。では、長野県の社会教育・生涯学習の振興はどのようなものか、県は何をすべきかという観点で、今日もご指導いただいたわけでございます。市町村ごとそれぞれの特色がありますので、長野県の社会教育はこうなのだというようなお仕着せをするようなことは県の仕事ではないと思っています。同時に77市町村あり、強いところ弱いところたくさんありますので、素晴らしい取り組みもあれば、何をやってよいか模索をしながら次の1歩を踏み出せない地域もある訳でございます。そういう意味で素晴らしい県内の取り組みの情報をしっかり把握しながら、教育事務所の中に生涯学習の担当があるということは、県の強みだと思っていますので、教育事務所が、若干どうすればよいのか分からないと考えている市町村の手助けができるようにやっていかなければいけないと思っています。

土井会長を始め委員の皆さん方には、一日貴重なご意見を賜りましたことに感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

5 閉会行事

(伊那市高遠町総合福祉センター)

- (1) 教育委員会文化財・生涯学習課長挨拶
- (2) 諸連絡